

よる研究で、遺伝子との関連はなく、患者のプライバシーを守る以外特別な倫理面での配慮を要しないと判断した。

#### C. 研究結果

1) ACTH正常基準値以上の症例は12例9.2%であり、そのうち8例67%に客観的なストレスを認めた。ストレスの内容は頸椎手術前2例、転院症例でRAへの不安が著名な2例、大腸ガン1例、過度の仕事1例、骨折後のリハビリ1例、人工肘関節施行後の骨折とメタローシスの合併1例であった。

2) DHEA(S)基準値未満の症例は17例13%であり、ACTH、DHEA(S)とともに基準値未満の症例は9例約7%であった。

3) DHEA(S)は年齢と逆相関( $r=-0.45791$ )していたが、血沈、RBC、CRP、MMPとの相関はほとんどなかった。

#### D. 考察

尿中17OHCS、17KS-S測定でのストレス評価は、これら尿中ストレスホルモンの連続的な測定でその変動をみて行えるものとわれわれは考えており、前回報告した。今回ACTH、DHEA(S)の測定は採血の苦痛をともなうため頻回に行うことは困難で、大部分の症例で1回みの計測データを評価した。なおRAではDHEA(S)の低下している症例が認められるとの報告があるため、今回はDHEA(S)でのストレス評価は行わなかったが、このホルモンがストレスによって変動するか否かを調査するためには今後DHEA(S)を連続的に計測し評価していくことが必要なものと考えている。またストレスによるACTH上昇例でも、ストレスの存在を今回、医師及び患者の主観的な評価で行っており問題があるものと思わ

れ、Holmsテストに類するような、しかも中・短期間のストレスを把握できるような評価方法の開発が望まれるものと考えている。このように採血方式でのストレス測定は尿検査に比べて患者の負担が大きいが、他方われわれは、尿中17OHCS、17KS-S及びACTH、DHEA(S)を同時測定することによりストレスのみならずHPA系の機能を評価でき、患者の病態把握に有用なものと考えている。

#### E. 結論

尿中17OHCS、17KS-Sのみならず、血中ACTHの測定はRAのストレスを評価する指標になりえることが示唆された。

#### F. 健康危険情報

#### G. 研究発表

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
田中雅人, 中原進之介, 小浦宏, 他	軸椎垂直亜脱臼に対するインストゥルメントを使用した後頭骨頸椎固定術	雑誌整形外科	53	373-379	2002

20020807

以降は雑誌/図書に掲載された論文となりますので、  
P.20の「研究成果の刊行に関する一覧表」をご参照ください。